

東原遺跡 III

HIGASHI HARA SITE

1995・3

長野県飯山市教育委員会

東原遺跡 III

HIGASHI HARA SITE

1995・3

長野県飯山市教育委員会

例 言

- 1 本書は長野県飯山市大字照岡字東原に所在する東原遺跡試掘調査報告書である。
- 2 東原遺跡は昭和24年にa～cの3地点が発掘調査され(第一次調査とする)、昭和27年にも桑名側郵便局の地点が発掘されている(d地点・第二次調査とする)ので、今回の調査地点をe地点(第三次調査)とし、本報告書も「東原遺跡III」として報告する。
また、圃場整備事業に伴う試掘調査も平成6年に行われている(f地点)。
- 3 調査は、桑名側馬場地区の住宅移転に伴う試掘調査で、飯山市教育委員会が国庫補助事業を受け、平成6年10月18日から11月15日まで実施した。
- 4 今回の発掘地は過去に削平されたため遺構は検出されていないが、置土層から縄文時代の遺物が出土している。
- 5 発掘調査は以下に掲げる組織で実施した。

飯山市遺跡調査会(平成6年度)

| | | |
|-------|-------|-------------------------|
| 顧問 | 小山 邦武 | 市長 |
| 会長 | 滝沢藤三郎 | 教育委員会委員長 |
| 副会長 | 水野 光男 | 社会教育委員長 |
| 委員 | 高橋 桂 | 文化財保護審議会議長・日本考古学協会会員 |
| | 田中 広司 | 議会総務文教委員長(平成6年12月11日退任) |
| | 藤巻 泰雄 | 議会総務文教委員長(平成6年12月12日就任) |
| | 中村 敏 | 公民館長 |
| | 小川 幹夫 | 教育委員会委員長職務代理 |
| | 岩崎 彌 | 教育委員会教育長 |
| 事務局長 | 月岡 保男 | 教育委員会教育次長 |
| 事務局次長 | 町井 和夫 | 教育委員会社会教育係長 |
| 事務局員 | 望月 静雄 | 教育委員会社会教育係 |
| 事務局員 | 川口 学実 | |
| 調査団 | | |
| 団 長 | 高橋 桂 | 飯山北高等学校教諭 |
| 総括担当 | 望月 静雄 | 教育委員会事務局職員 |
| 調査員 | 常盤井智行 | |
| | 桃井伊都子 | |
| | 田村 滉城 | |
| | 小林 新治 | |

作業参加者(順不同)

宮本鈴子・万場義秋・小出まさ子・石沢悦次・竹内大五郎・北条辰男・小林経雄・樋山巖・山崎満枝・田中朝治・市村ますみ・土屋久栄・渡辺金治・鈴木操・鈴木ため・滝沢きよえ

整理作業参加者(順不同)

小林みさを・小川ちか子・藤沢和枝・川口学実

- 6 本書で使用された方位は磁北である。
- 7 本書の作成は、高橋桂調査団長指導のもと、常盤井智行が主体となって行った。
 図面トレースは小川ちか子・藤沢和枝があたり、遺物実測・トレースは小林みさお・藤沢があたり
 遺物写真は田村が撮影した。文責は目次に記した。
- 8 発掘調査にあたっては、地元桑名川の平田辰男万場区長、樋口伸一、小田切周一、佐崎実円、小田切
 祥時の各氏にご協力を得た。また、現在山梨県在住の小田切茂氏には、過去の調査についてのご教示
 を得、当時の所見についてコメントをいただき本書に掲載させていただいた。
 なお、報告書の作成にあたっては、中野市歴史民俗資料館の中島庄一氏には縄文土器についてご教示
 を得た。記して感謝申し上げます。
- 9 発掘調査の図面・出土品は、市内大深の飯山市埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

例 言

| | |
|---------------------|----|
| 第1章 遺跡の位置と環境 | 1 |
| 1 遺跡の位置と環境 (望月静雄) | 1 |
| A 地理的環境 | 1 |
| B 歴史的環境 | 1 |
| 2 遺跡の概要 | 3 |
| A 過去の調査と研究 (高橋 桂) | 3 |
| B 昭和24年出土遺物 (常盤井智行) | 4 |
| 3 調査経過 | 9 |
| A 試掘調査 (望月) | 9 |
| B 調査日誌抄 | 9 |
| C 層 序 (常盤井) | 9 |
| 第2章 遺構と遺物 (常盤井) | 10 |
| 1 遺 構 | 10 |
| 2 遺 物 | 12 |
| A 縄文土器 | 12 |
| B 弥生土器 | 15 |
| C 石 鏃 | 15 |
| 第3章 補 遺 (小田切茂) | 18 |
| 第4章 ま と め (高橋) | 21 |

写真図版

第1章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と環境

A 地理的環境

東原遺跡は、長野県飯山市大字照岡字東原に所在する。

甲信国境に源を発する千曲川が、信濃に残す最後の平が飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると、千曲川は信越国境の峡谷地帯（通称市川谷）を下刻曲流しつつ新潟県津南町に至り、ここで信濃川と名を改め、いわゆる津南河岸段丘群を形成しやがて日本海に注ぐ。

東原遺跡は、飯山盆地を流下した千曲川が峡谷地帯を流れる左岸に立地している。この付近は両岸まで山地がせまりほとんど平坦地はないが、遺跡の所在する東原地籍は千曲川の河岸段丘や凹地が存在し、狭小な平地を形成している。遺跡はこのうち千曲川の形成した河岸段丘面に立地し、現在では遺跡の一部が千曲川の攻撃斜面によって削除されている。

遺跡の範囲は、住宅等が建てられており明確ではない。過去の調査・研究によれば旧桑名川郵便局が建てられている場所を中心として微高地全面に広がるらしい。西北側は約100mで通称岡山上段と呼ばれる高位段丘面の段丘崖に接するが、その間は凹地状の湿地帯が広がる。なお、北東側には小河川が千曲川に注ぎ低地となっている。

東原遺跡は、このように千曲川に面した段丘面に位置し、北東を小河川、西側を低湿地によってそれぞれ画され、独立した丘陵上に占拠していたのである。

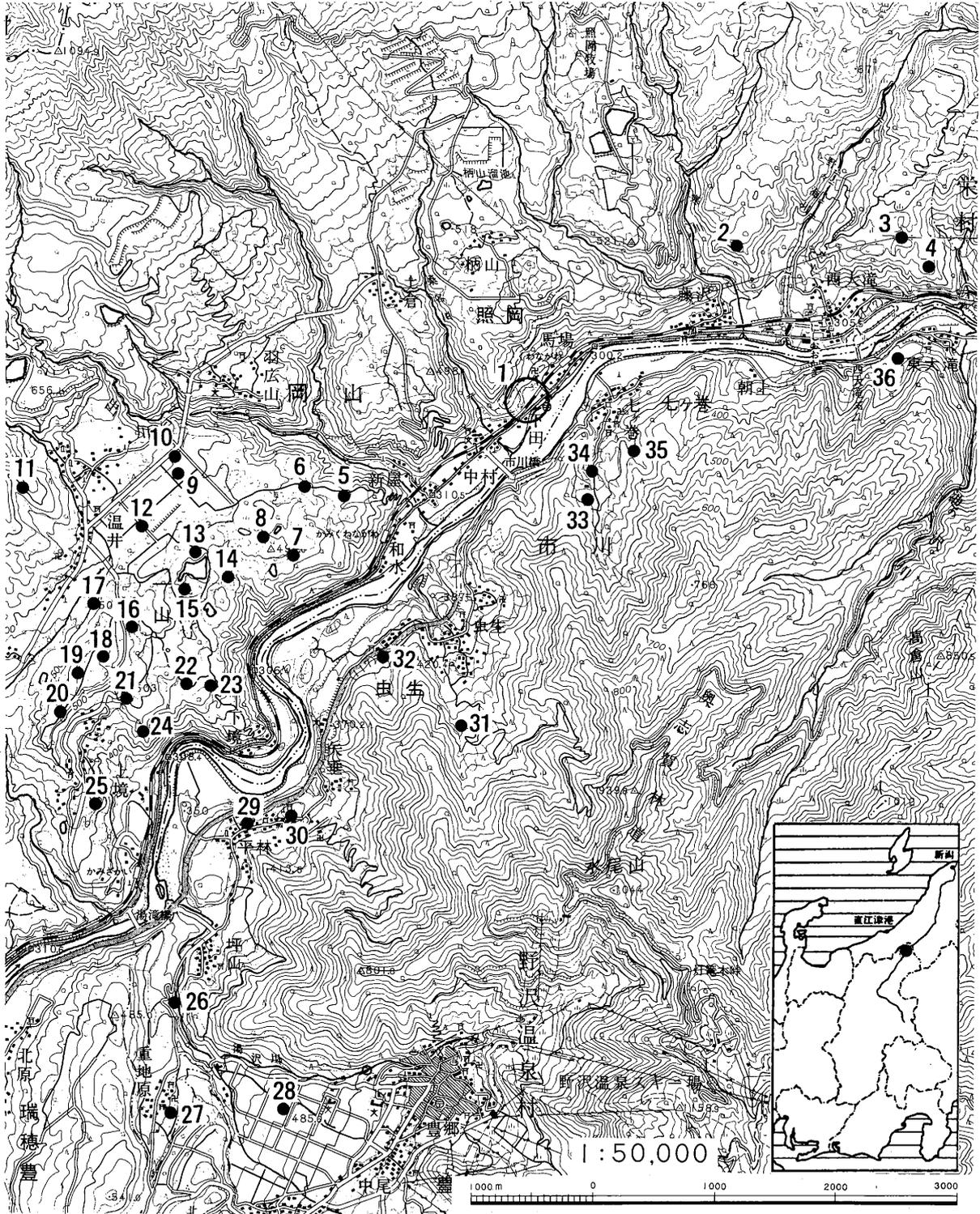
なお、西側の低地のほぼ中央をJR飯山線が走っている。

B 歴史的環境

信越国境の千曲川峡谷地帯における埋蔵文化財包蔵地はいまひとつ明確でないのが現状である。これは多くが山林であり遺跡の所在が明確でないこと、大規模開発に伴う調査が少なかったことによる。近年、通称岡山上段地域において関東農政局による農地開発が行われ、それに伴う調査で多くの遺跡が確認された。また、野沢温泉村では村史編纂や国道バイパスに伴う調査によって遺跡の所在も徐々に判明してきている。以下に大まかではあるが年代別に説明したい。

旧石器時代 飯山盆地から栄村・新潟県津南町にかけては、旧石器時代の遺跡が密集することで知られている。東には栄村小坂遺跡、飯山盆地内には飯山市太子林・日焼・上野・関沢の各遺跡など著名な遺跡が多い。図1はそうした遺跡の中間地帯にあたり、飯山市新堤(14)・トトノ池南(19)遺跡、野沢温泉村蕨平遺跡(36)などは石器群も豊富である。特にトトノ池南遺跡は、エンド・スクレイパーを主体とする石器群で注目されている。今後ともこの地域に良好な旧石器時代の遺跡が発見される可能性が高い。

縄文時代 最古の縄文時代遺跡としては、飯山市カササギ野池遺跡(8)で爪形文土器が発見されている。飯山地方では最も古い縄文遺跡である。そのほか、大原・鳴沢頭(14)遺跡で表裏縄文土器や押型文土器が発見されている。遺跡の規模は小規模である。中期には野沢温泉村岡ノ峯(28)・平林A(29)・二座(35)、飯山市向原遺跡などがある。そして、後期・晩期になると東原遺跡をはじめ、野沢温泉村蕨平・岡ノ峯など遺跡数は少ないが大規模で豊富な内容を持つ遺跡が現れる。蕨平・岡ノ峯遺跡では石棺墓が発見され、縄文時代の墓制研究の重要な遺跡となっている。



- | | | | |
|----|----|----|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5 | 6 | 7 | 8 |
| 9 | 10 | 11 | 12 |
| 13 | 14 | 15 | 16 |
| 17 | 18 | 19 | 20 |
| 21 | 22 | 23 | 24 |
| 25 | 26 | 27 | 28 |
| 29 | 30 | 31 | 32 |
| 33 | 34 | 35 | 36 |

図1 調査地の位置と周辺の遺跡

弥生時代の遺跡は、飯山盆地を北限として本地域には確認されていない。大型蛤刃石斧や弥生式土器細片が採集されることもあるが、断片的に出土したとしてもそれが生活していたと証する資料とはいえないと考えている。現在のところ、水稻耕作を新たに生業に加えた弥生文化は当地方まで波及しなかったと考えられるのである。ちなみに対岸の野沢温泉村や北に接する栄村においても、弥生時代の明確な遺跡はないのである。

古墳時代の遺跡も確認されていない。ただし、東原遺跡に近接した馬場地籍には二基の古墳が確認されている。また、JR飯山線の敷設に際して、付近より土取りした時に勾玉や直刀が発見されているので、そのほかにも古墳が存在していた可能性が高い。これらの古墳については、生産基盤を有していた結果と視るよりも街道との関係で築造されたとする意見が強い。

平安時代になると再び遺跡が多く確認されている。飯山市長者清水(12)・新堤・トトノ池南遺跡、野沢温泉村虫生A(31)、平林B(30)遺跡などである。いずれも小規模で、集落を形成していたかどうかは不明である。

引用・参考文献

- 飯山市教育委員会 1986 『飯山の遺跡』
野沢温泉村教育委員会 1994 『蕨平遺跡』

2 遺跡の概要

A 過去の調査と研究

明治23年県道谷街道（大正9年国道10号線昇格、現国道117号線）が起工され、翌明治24年竣工した。この谷街道は、桑名川では東原丘陵地の中央部よりやや西側を南北に削りとして敷設された。『岡山村史』で江口善次氏は、「注意する人あったならば何か採集出来たであろうと思われるが、当時注意されずに終わらしたらしい」と述べられている。明治29年宮沢甚三郎氏が、人類学雑誌第12巻128号に「北信地方の石器時代遺跡」として旧下水内郡、下高井郡の遺物を紹介している。もし、東原で遺物が採集されていたならば、当然宮沢氏の紹介するところとなったことであろう。

東原遺跡が好事家の注目を集めるにいたるのは、県道谷街道が開削されてから30年ほど経過してからであった。大正10年代初頭、飯山鉄道が、桑名川の湿地帯を北東に向けて敷設されることとなった。この鉄道敷設に際し、湿地帯であるが故に線路を土盛りすることが必要となった。その土盛りの土砂の採取地として目を付けられたのが、小高く盛りあがった丘陵状の小台地の東原地籍であった。当時、谷街道敷設により台地の一部は開削されていたが、台地の北方の道路両側は小高かったようである。この小高い道路西側の土砂を採取して線路の土盛りをしたようである。そして、この土砂採取の折に多くの遺物が発見された。縄文土器、石器のほかに勾玉、切子玉等も発見され、古墳が存在したことを示している。更には八稜鏡も2面発見された。明治時代末から大正時代初めは、縄文時代人＝アイヌ人説が広まっていた。縄文土器や石器はアイヌ人の使用によるものとの説が一般にも広まり、識者の古代への関心が高まっていた時期であった。岡山にも古代の遺物に興味をもち、村内各地の遺物を丹念に蒐集しておられた人物が二人いた。その一人は、いうまでもなく上桑名川の医師渡辺喜平次氏であり、他の一人は温井在住の北条幸作氏である。

この二人によって、東原出土の遺物は採集保存された。勿論作業に従事した人夫より手に入れられたものである。このうち、渡辺氏蒐集の遺物は、藤森栄一氏の知る所となり、昭和9年史前学雑誌第6巻6号

で「信濃下水内郡鳴沢頭の土器及び石鋸」という題で鳴沢頭出土遺物の資料紹介をされている。その文章の末尾に「信濃では稀有な加曾利B式を中心とする遺物で……」と渡辺喜平次氏蒐集の東原出土遺物について述べられている。東原遺跡の存在が学界に初めて知られるにいたった記念すべきものであろう。

昭和18年藤森栄一氏は「信濃下水内郡桑名川の土器」という題で人類学雑誌58巻3号で渡辺喜平次氏蒐集の東原出土遺物を詳細に報告されている。ここに東原遺跡が、県内でも縄文後期の著名な遺跡として知られるにいたったのである。

さて、渡辺喜平次氏が蒐集された遺物は、どうなったであろうか。氏の死亡とともに多くは人手に渡ってしまったらしい。ただ一部が岡山小学校に寄付されたようである。私は昭和32年夏下水内郡下の踏査を試みた。その折、岡山小学校に立寄り理科室で東原出土の浅鉢形土器や鉢形土器、石器類を見た。これが恐らく渡辺氏が寄付されたものであろう。これらの遺物は、岡山小学校の改築とともに姿を消してしまっている。一方、北条幸作氏蒐集の遺物は現在で保存されている。渡辺氏の蒐集に比較すれば、いたって少量であるが。

さて、東原遺跡が再び脚光を浴びるのは第二次大戦後である。第二次大戦後、科学的歴史の確立を目指して、考古学研究が各地で盛んに行われるようになった。その波は、飯山地方にも当然波及した。飯山北高等学校では、森山茂夫、小田切茂、清水亨、田中清見氏等が中心となり郷土史研究会が設立された。この内、森山、清水氏は長峰を中心に、田中清見氏は有尾中心に、小田切茂氏は東原中心にというように自らフィールドが決まっらしい。

小田切茂氏は、実家の近くということもあって、東原遺跡に興味と関心をもち、森山茂夫氏等と昭和24年7・8・11・12月と4回にわたって発掘調査を行っている。小田切氏が行った発掘は3地点にわたっている。a地点（北部）、b地点（東部）、c地点（南東部の川沿い）である。b地点で安山岩の平石で囲んだ炉址を発見している。各地点から縄文中期後半の土器、縄文後期土器、石皿、石鏃、石錐、石錘、軽石製浮石、土錘等多量の遺物が発見された。発見された遺物は、現在飯山市埋文センター、小田切茂氏宅に保管されている。そして、調査の結果は、長野県飯山北高等学校郷土研究会より「昭和24年度下水内郡遺跡発掘調査報告」とし発刊されている。このことについては、宮坂英武氏も日本考古学年報2（昭和29年度発行）に大略を紹介している。

昭和27年晩秋、飯山北高等学校郷土研究会は、神田五六氏を指導者として現郵便局の位置付近を発掘調査した(d地点)。そして、配石遺構と思われるものを発見し、縄文中期後半、縄文後期の土器を多量に発見した。小田切茂氏は、この調査を境に自分の仕事に専念され、考古学から去っていかれた。以後、東原遺跡は縄文後期の代表的遺跡として知られるだけで、何等の調査も行われなかった。かつてはきれいに手入れされていた畑も、一部はすっかり荒れ果てて雑草地と化している。近々、東原遺跡上に大規模な築堤工事が行われるようである。その折には、また調査が行われるであろう。どのような遺構、遺物が出土するのか期待の大きさとともに、重要な市内の遺跡がまた一つ消えていく。複雑な心境である。

B 昭和24（1949）年出土遺物（図3・4）

昭和24年に飯山北高校郷土研究会が発掘した遺物の一部が残されていたので、ここで紹介する。24年の発掘はa～cの3地点を調査している。図示したもののうち13のコップ形土器がa地点出土品であるほかはすべてc地点出土品である。

1～4は中期後葉加曾利E式併行期に比定される。1は微隆起線文で渦状の文様を施文する。口縁部が内湾する浅鉢であろう。砂粒を多く含み軟質で茶色を呈する。2は3条の隆起線文と羽状の集合沈線文をもつもので、新潟県に類例がある。砂粒を多量に含み淡茶色を呈する。3も羽状の集合条線文をもつもの

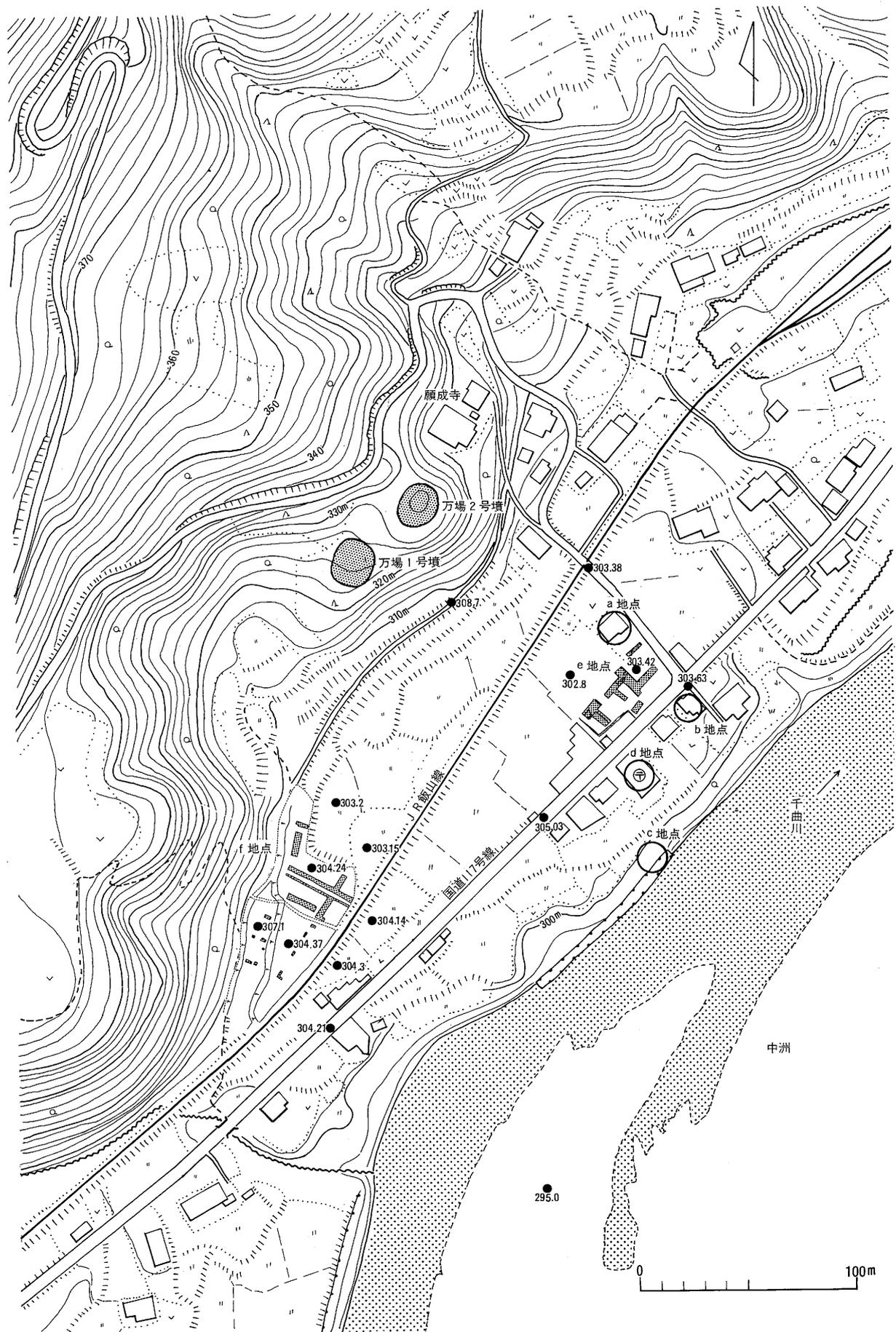


図2 調査地周辺の地形 (1 : 2500)

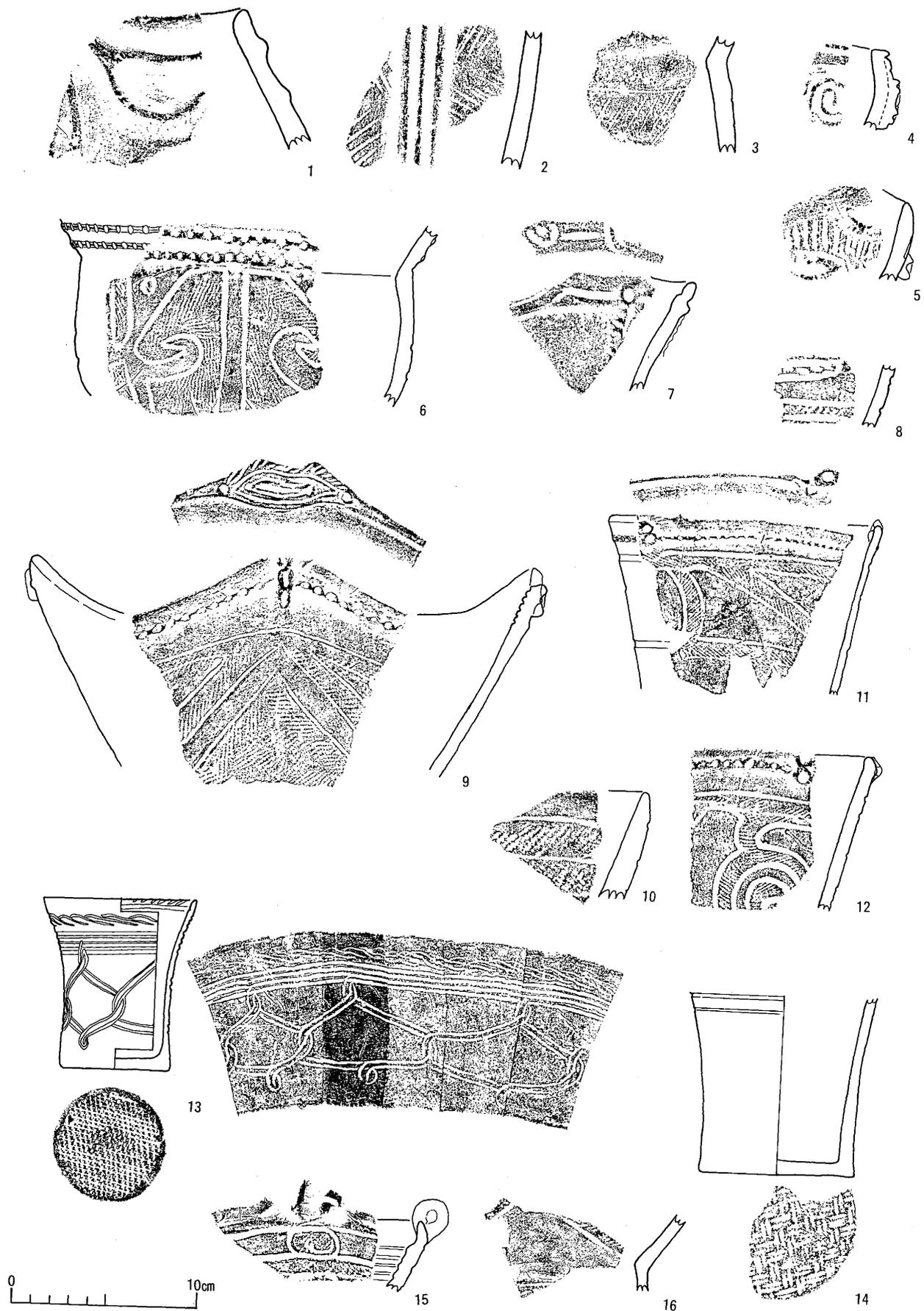


图3 昭和24年出土遺物(1) (1:3)

で当期に含める。砂粒を多量に含み茶色を呈する。4は沈線と渦状の半隆起線文をもつ口縁部片である。胎土・色調ともに2と近似する。

5は波状口縁で、刻み目文帯の間に隆起線による口唇状の浮文を配している。中期の所産であろう。胎土に砂粒を多量に含み淡褐色を呈する。

6～12は後期前葉の堀ノ内式併行期に比定される。6は頸部に2条の刻み目突帯をもち、胴部は沈線で区画された磨消縄文による垂下文と「J」字状風の文様を配する。内面は丁寧に磨かれている。胎土に砂粒を含み茶色～暗茶褐色を呈する。7は波状口縁の頂部片で、口縁端部を肥厚させその内外面に沈線文を配し、外面頂部に円形刺突文を置きその下に刻み目突帯を垂下させている。胎土に砂粒を含み黄灰色を呈する。8は横位の帯縄文と、沈線文で囲む刺突文をもつ。胎土に砂粒を多量に含み黒灰色を呈する。9は波状口縁の深鉢で、口縁下に刻み目隆帯をもつ。頂部には3連の鎖状文を配する。磨消し縄文の文様は菱形が縦に連結するものと考えられる。内面は丁寧に磨かれている。胎土に砂粒を含み黒灰色を呈する。10は横位の帯縄文をもつ厚手の口縁片である。内面は丁寧に磨かれている。雲母・細砂を多量に含み暗褐色を呈する。11は口縁下に「8」字状の浮文と刻み目隆帯を配し、その下に帯縄文をもつ。文様モチーフは「()」と斜線が交互に配されるものと考えられる。口縁端部は内傾し内側に1条の凹部を作る。また「8」字状浮文の内側に円形刺突と輪状の突起をもつ。内面は丁寧に磨かれる。胎土に砂粒を含み黒灰色を呈する。12は形態・文様パターンともに11に等しい。ただし帯縄文は渦状文である。胎土に砂粒を多量に含み茶褐色を呈する。

以上の堀ノ内式併行期のもののうち6～8は古い段階に、9～12は新しい段階に位置づけられる。

13～16は後期中葉の加曾利B式併行期に比定される。13は完形のコップ形土器で、浅い沈線によって加曾利B式に特徴的な紐文様が配される。口縁端部の一部に刻み目状の浅い押圧痕があり、その直下に沈線が1条めぐる。胎土に砂粒をあまり含まない薄手の精製土器で、黒灰色を呈する。底に網代痕がある。14もコップ形の土器だが、文様は平行沈線のみである。13に比べ胎土に砂が多く粗製である。底に粗い網代痕がある。15は渦状の突起をもつ浅鉢で、外面に加曾利B式に特徴的な「Q」字状文を配する無文帯と縄文帯をもち、内面に平行沈線文をもつ。黒灰色の精製土器である。16は頸部がくびれる浅鉢で沈線文をもつ。黒灰色の精製土器である。

17～19は底部で、17・18には網代痕がある。17・19は灰白色で砂粒を多く含む。18は暗茶褐色薄手で砂粒を含まない。

20は集合沈線文をもつ薄手の土器で新潟県に類例があり、堀ノ内式の前段階に併行すると考えられる。胎土に砂粒を多量に含み暗茶褐色を呈する。

21は撚りの弱い無節の縄文土器である。砂粒を含み、淡黄灰色を呈する。繊維は含まない。前期の所産か。

22～25は注口土器の把手および注口部である。22は把手に「8」字状の浮文を付す。黒灰色の精製土器である。23～25は注口部で、23・25は基部に沈線文がある。いずれも細砂を含み軟質である。

26は石錘である。偏平な河原石の一面に凹線を抉り縄掛け部としている。黒色砂岩系。重さ85.8g。

27は軽石製の浮子である。偏平な軽石の一端に両側から穴を穿ち縄通しとしている。重さ10.0g。

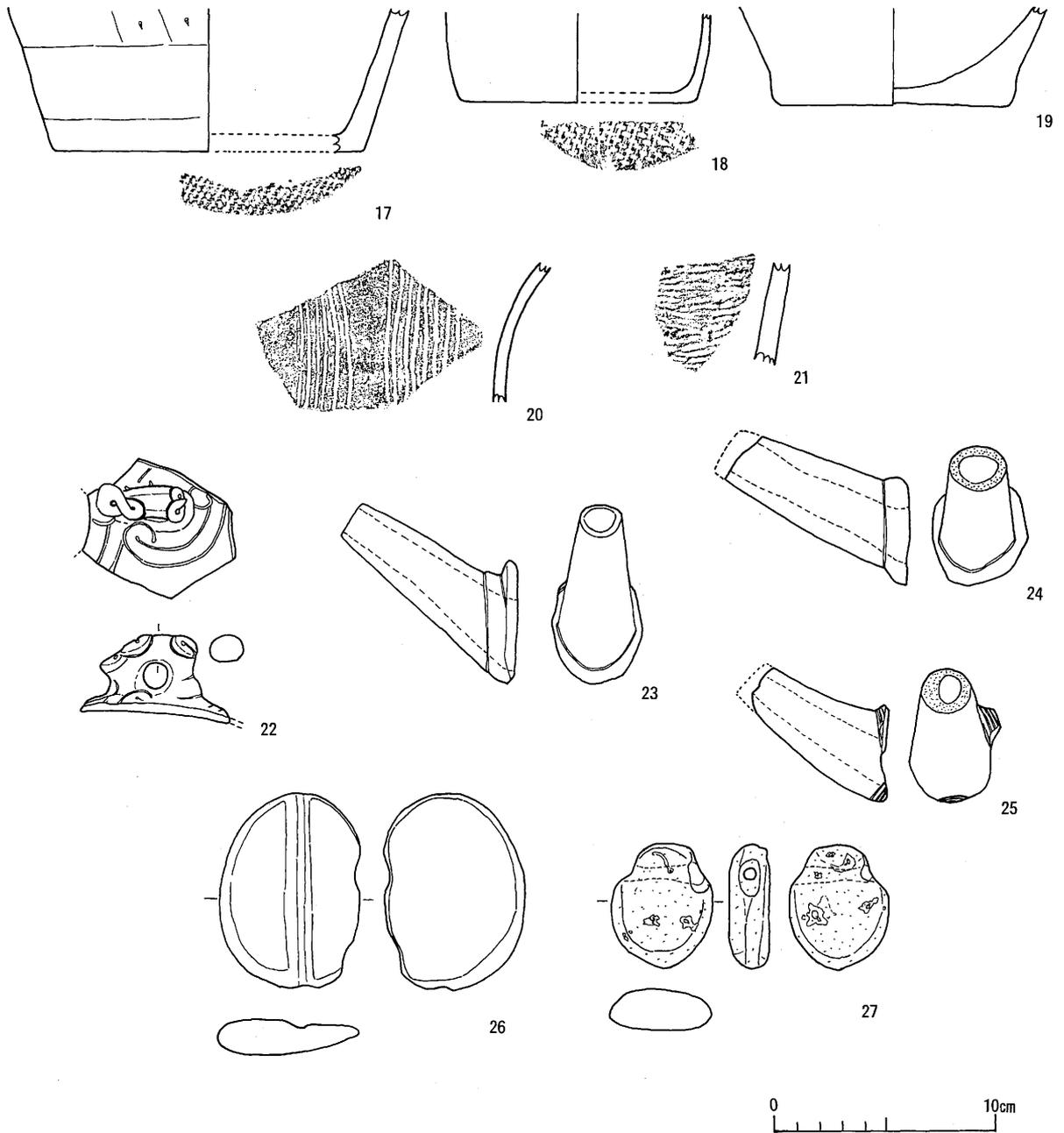


图4 昭和24年出土遺物(2) (1:3)

3 調査経過

A 試掘調査

今回の試掘調査は、住宅移転に伴う調査であった。対象となった東原遺跡は範囲がいまひとつ明確でなく、さらに、移転場所は以前に削平された場所であり、遺跡はすでに消滅しているのではないかとの地元の方々の意見もあり、とりあえず試掘調査を実施することになったものである。対象地区は畑地で、大根やアスパラ等が作付されていた。このため、収穫直前の大根等の畑については調査せずに避けて試掘坑をあけることとした。また、住宅建設の時期的なこともあり、遺構等が発見された場合にはそのまま発掘調査に切り替えて調査することも、予定として考えていた。

グリッドは畑地の区画に合うように一辺5mで任意に設定したが、試掘坑は作物の関係で必ずしもグリッドと一致するようにはできなかった。なお、試掘坑はなるべく対象地区全面が把握できるように多くのトレンチをいれた。

B 調査日誌抄

平成6年10月7日 発掘器材搬入。地元委員と打ち合わせ。

10月18日 平田区長と協議。畑作の関係で、調査可能地を選定する。対象地区内の刈り払いを行い、9地点において任意にテストピットを掘り土層の状況を確認する。テストピット調査中に縄文式土器1点検出する。

10月19日 バックホーにより表土除去を行う。西端よりジョレンがけ開始。耕作土と地山の砂層の間に攪乱された置土があり、この層より縄文後期土器が散在して出土する。基準杭・地区割杭設定。

10月20日 A～C-7～9区の遺物出土状態写真撮影。地区ごとに取り上げ。

10月24日 精査続行。遺構は認められないようである。100分の1の略図作成。

10月25日 B・C-8区写真撮影。E-5着手。

10月26日 A-1・2着手。C・D-8精査した後写真撮影。他の地区においても清掃後写真撮影を行う。

10月27日 ジョレンがけ精査ほぼ完了する。A～C-7～9平板測量完了する。B-4区で炭焼き穴検出。

10月28日 A～D-1～4区、完掘状態写真撮影の後50分の1により平板測量を行う。

11月1日 平板図にレベル記入。土層図作成。

11月2日 土層図作成完了。

11月14日 重機により埋め戻しを行う。

11月15日 手作業により排水溝の原状復元を行う。器材等を撤収してすべてが完了する。

C 層序(図5)

調査地内の基本的な層序は上層から、1 茶褐色土層(耕作土 厚さ約30cm)、2 茶褐色土に黒色土・灰白色粘質土・黄褐色粘質土が混じる土層(置土 厚さ30～50cm)、2'2が堅く締まり上に鉄分層がある土層(床土 厚さ10～15cm)、3 灰色砂と灰白色粘質土の互層(厚さ30～50cm)、青白色粘土層である。

調査地は現状でも東の国道117号線から約1m程低く、またかつては国道部分も今より1.5m程高かった

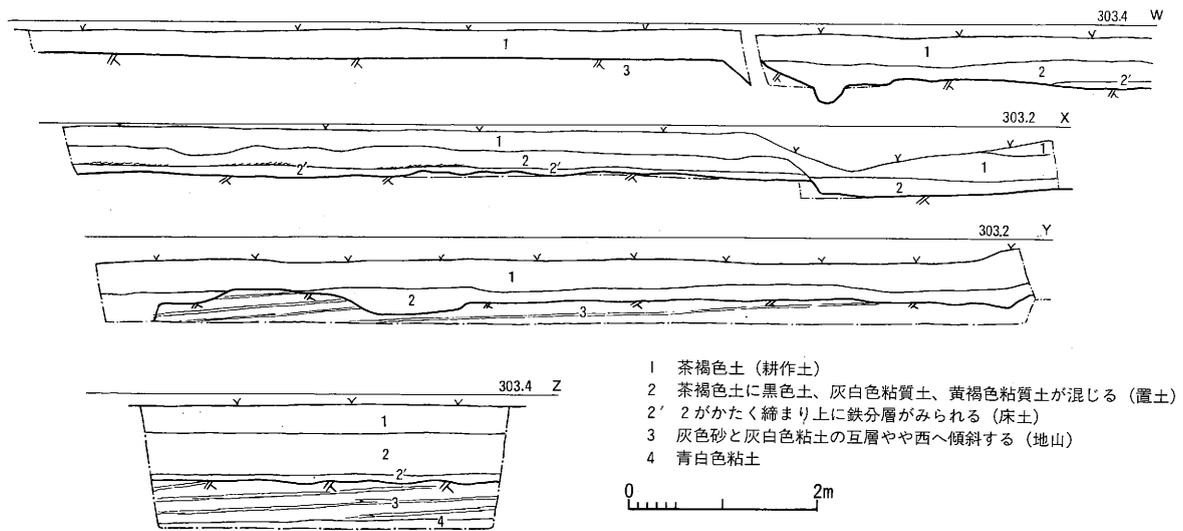


図5 調査地土層図 (1:80)

という地元の方の話などから、当地は古く削平されたと考え、3の砂層以下を地山と認定した。したがって遺構検出面は3の砂層上面である。

遺物は置土層である2および2'から小片が散在的に出土している。2・2'には乾電池や鉄道の釘が混じり新しい置土である。遺物はその置土の中でも黒色土に混じって出土しているものが目立ち、本来は黒色土の包含層にあったものと考えている。この置土は遠方から搬入したものとは考えにくく、遺跡地内つまり近辺から移動されたものと考えている。したがって出土遺物も当遺跡の遺物と考えている。

遺物は原位置を保つものではないが一応グリッド毎にとり上げた。グリッド毎の出土量に差はない。

第2章 遺構と遺物

1 遺 構

遺構検出面は砂層上面であるが、近世以前に溯る遺構は検出していない。

B-3・4区、A-1区、A-2区にある直径1.5mの円形土坑は現代の攪乱坑である。

B~D 8区にある段は耕作地境の段であろう。段上・段下ともに砂層がベースである。

B-4・5区で炭焼き窯跡が検出されている(図7)。1.45m×4.1mの隅丸長方形土坑の中央から煙道が延びている。煙道の反対側が深く、焚き口であろう。煙道の中央に土管が二個直列して置かれている。これは窯使用時には煙道出口に据えたものを不使用時に坑内に保管のために置いたものであろう。埋土には炭や焼土が混じり、坑底に直径3~5cmの炭が数本残っていた。

地元の方の話によれば昭和30年代頃に炭焼きが行われていたとのことである。

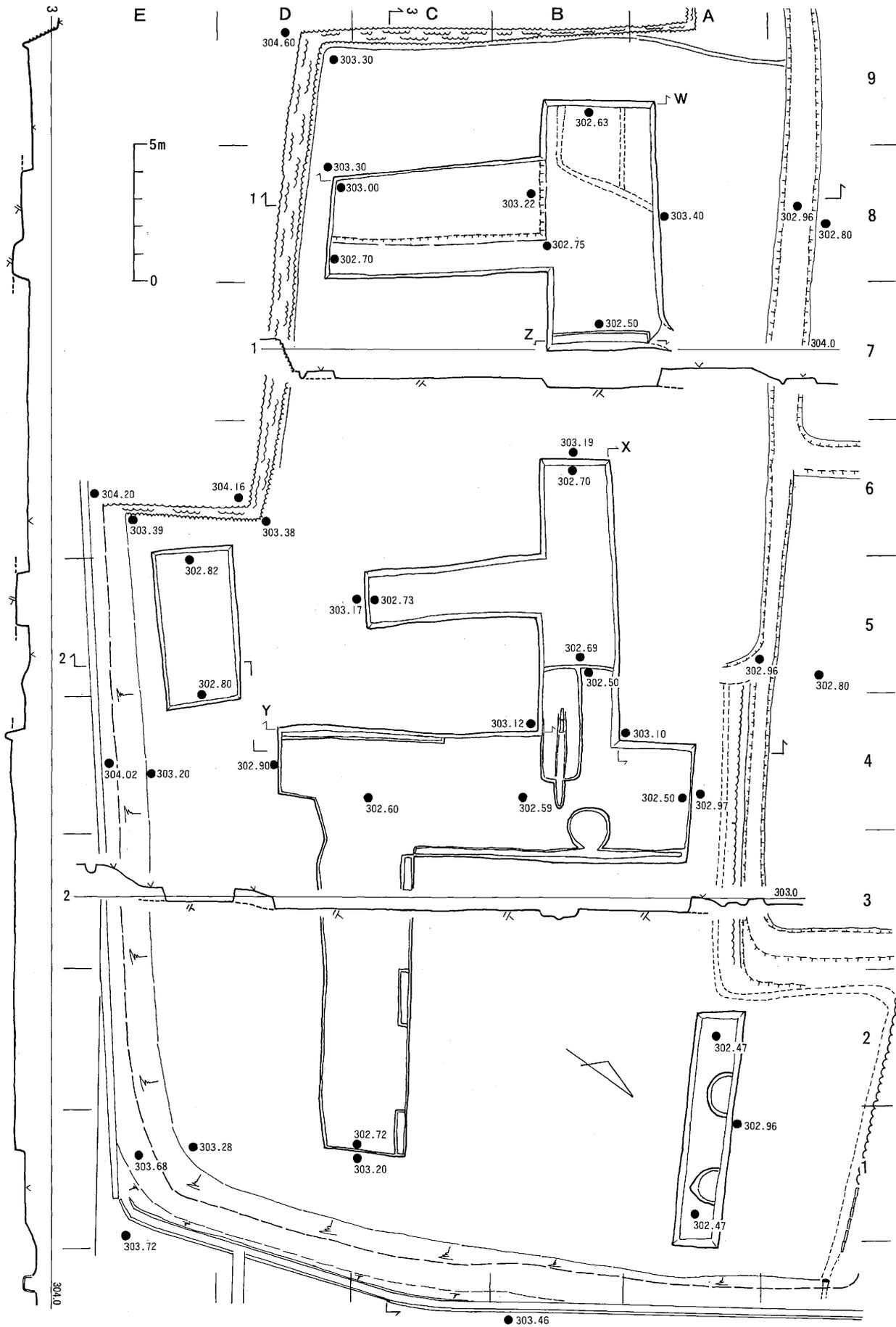


図6 調査地全体図 (1 : 200)

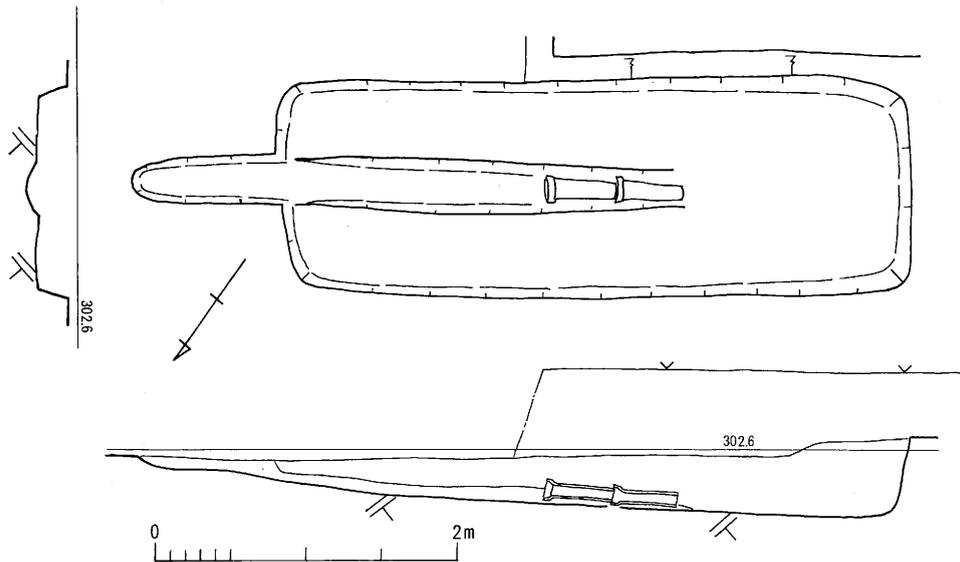


図7 炭焼き窯実測図（1：50）

2 遺物

前述したとおり、遺物はすべてガラスのビン・鉄道の釘などが混じる置土層から出土しているため、原位置を保つものではない。しかし置土は遠方からの搬入土とは考えにくいので、当遺跡地内から移動されたものと考えている。

出土遺物の内訳は、大半が縄文時代の土器片で、ごく少量の弥生土器片と縄文時代の石鏃がある。弥生土器については、従来は弥生文化が認められなかった地域であり、その評価は将来にゆだねたい。

A 縄文土器

早・前・中・後期の土器があり、主体は中・後期である。

(1) 早期の土器（図8 1～4）

1は金雲母細片を多く含む赤褐色薄手の土器である。外面と口縁端面に細かい縄文が施されている。内面には縄文が施されていないものの表裏縄文土器に形態が近似する。

2～4は撚糸文土器である。いずれも砂粒を含むが焼成は良好。2・4はやや斜位の、3は縦位の撚糸文が施されている。3は無文部が認められる。中期の木目状撚糸文土器の可能性もある。

(2) 前期の土器（図8 5～7）

5は羽状縄文土器である。雲母・細砂を多量に含む。焼成は良好、暗褐色を呈する。

6・7はやや粗い縄文が施されている。内面は平滑。砂粒を多量に含む、焼成は堅緻。暗茶褐色を呈する。

これらは繊維の混入がなく前期でも後半期に置かれようか。

(3) 中期前葉の土器（図8 8～21）

8～20は北陸の新保・新崎式土器の影響が強いもので、市内深沢遺跡に良好な類例がある。半截竹管による半隆起線文で「U」字状文や直線文を配する。8～13は縄文を地文とする。18・19は平行条線文を充

填する。20は刻み目文が充填される。20を除き胎土に金雲母の細片を多量に含み、暗茶褐色を呈する。

21は半截竹管による半隆起線文を横走させ、その間に縦位の沈線文を配する口縁部片である。口縁端から1条目と3条目の半隆起線文に刻み目を施す。新保・新崎系の中でとらえられよう。

(4) 中期後葉の土器 (図8 22~34)

22~28は中期後葉の加曾利E式併行期に比定される土器である。22~27は微隆起線文を付す縄文地文の土器である。22・23は口縁端に蕨状の渦文をもつ。渦文は垂下するものと思われる。新潟県津南町沖、原遺跡に類例がある。砂粒を多く含み、茶色を呈する。25は波状文を垂下させる。縄文は粗い。灰白色を呈する。26・27は加曾利E様式の中でとらえられよう。細砂を多く含み暗茶褐色を呈する。

28~31は太い刻み目隆帯をもつものである。小片のため地文はわからない。このうち28・29は口縁下に棒状具による押圧で刻み目を施した隆帯をもち、加曾利E式併行期と思われる。30・31は棒状具による刺突状の粗い刻み目をもつもので当期に含めるには疑問が残る。

32・33は羽状の沈線文をもつものである。昭和24年出土品(図3 2)と同類と考え当期に比定した。

34は屈曲した口縁端部に微隆起線による渦文を施したもので、縁帯文土器に似ているが、堀ノ内式併行期のものは沈線で表出されるのに対し本例は隆起線によるので当期に含めておいた。

(5) 中期後葉~後期前葉の土器 (図8・9 35~48)

35~48は中期後葉から後期前葉に比定される粗製の深鉢である。出土量が多い。

35~40は縄文を粗く施した厚手の土器である。縄文は典型例の35のように縄文帯と無文帯が交互に配されるように施される特徴がある。いずれも内面は丁寧なナデなどで平滑にされ、焼成は良好。37・38には内面に黒色炭化物が付着している。

41~48は条線文が施された厚手の土器である。条線は直線的なものと蛇行するものがある。47・48は隆帯が垂下する。48の隆帯は押圧による凹凸がある。いずれも内面は平滑であり、47を除いて焼成は良好である。

(6) 後期前葉の土器 (図9 49~68)

49~54は三十稻葉式土器様式のものである。独特の刺突文が施されている。49・50は断面三角形の高い隆帯を垂下させる。51~53は鱗状の刺突文をもつ。54は刻み目隆帯と円形の刺突文をもつ。いずれも胎土に砂を含み、焼成は良好。

55~57も刺突文をもつもので堀ノ内式併行期と考えられる。55は内傾する口縁部片で屈曲部に刺突文を巡らし、以下に縄文を粗に施す。砂粒を多量に含み、軟質で橙色を呈する。56は直立する口縁下に刺突文を巡らす。57は沈線文間に刺突文を巡らせる。56・57ともに砂粒を含み、焼成は良好。

58~68は堀ノ内式併行期に比定される土器である。58~60は大きく開く口頸部片である。58は口縁端部が肥厚しやや波状口縁となる。59は堀ノ内式特有の刻み目隆帯が口縁下に巡る。60は頸部片で頸部に沈線で画された刺突文がめぐる。61は胴部片で沈線による()状の文様が配されるものである。61は内傾する口縁部片で沈線で囲まれた刺突文をもつ。63~67は沈線と磨消し縄文をもつものである。68は頸部に刻み目隆帯をもち、胴部に太い沈線で渦文を配するものである。これらはいずれも内外面ともにヘラミガキないしナデで丁寧に調整される。胎土には砂粒を含む。64・68は金雲母を含む。焼成はいずれも良好。58~60は黒灰色を呈する。65は赤橙色。他は茶色~淡茶色を呈する。

69~71は縄文に細い沈線をもつ土器である。年代については今のところよくわからない。いずれも細砂を多く含み、焼成は良好。淡褐色系である。



图8 出土遗物(1) (1 : 3)

(7) 後期中葉の土器 (図9 72~81)

72~81は加曾利B式併行期に比定される土器である。いずれも胎土に砂粒を含まず、丁寧にヘラミガキされ黒灰色を呈する薄手の土器である。

72~76は内面に突帯ないし沈線による平行線文をもつ浅鉢である。72・73は口縁端部が内屈し、端面に刻み目が巡る。75も端部が内屈するものと思われる。73は屈曲部内面に刺突文が巡る。75は三ヶ所の焼成前の穿孔がある。

77はコップ形の土器であろう。

78・80は口縁端部内面に一条の沈線が巡るもので、78は外面に細い刻み目隆帯を付し、80は口縁端面に刻み目が巡る。

79は沈線と縄文が横走する。81は口縁部に突起をもつ。

(8) その他の土器 (図10 82~96)

82~86は口縁下に沈線による斜行線文を配する土器である。内外面ともに丁寧にヘラミガキされる暗灰色の土器で、浅鉢と考えられる。斜行線文は加曾利B式から曾谷・安行式にみられる羽状文のくずれたものとも考えられるが、疑問が残る。後期の所産と考えている。

87~90は無文土器である。87~89は口縁部が肥厚する。87は波状口縁をなす。88は口縁下に小突起が付く。90は厚手の深鉢であろう。後期の所産と考えている。

91は2条の沈線が巡る小片で、内面に黒色炭化物が付着している。92・93は丁寧にヘラミガキされた口縁部片である。93は肩部に大きな刻み目を巡らす。いずれも今のところ所属年代は不明である。

94~96は網代痕のある底部片である。

B 弥生土器 (図10 97~99)

弥生時代中期の壺の小片が3片出土している。いずれも沈線を横走させ、97は刺突文、98は楯描文、99は縄文を施している。前述したように、これらの弥生土器を当遺跡の遺物とすることは保留する。

C 石 鏃 (図10 100)

基部を欠く黒色粘板岩系の石鏃が1点ある。重さ2.6g。



图9 出土遺物(2) (1:3)

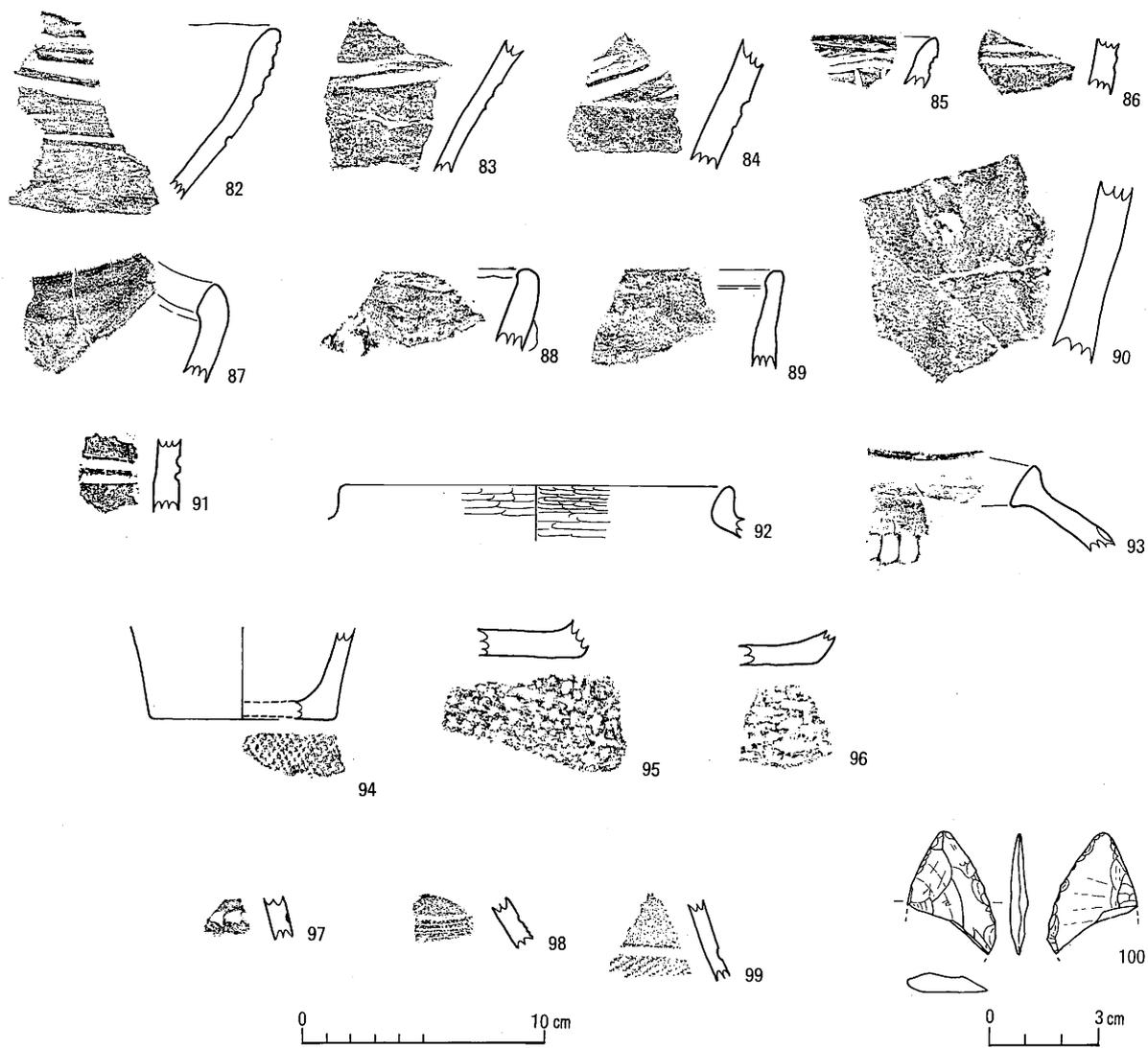


图10 出土遺物(3) (1 : 3 1 : 2)

第3章 補 遺

本稿は、昭和24年に当時長野県立飯山北高等学校の3年生であった小田切茂氏が、a・b・c地点の発掘調査を実施したその報告である。本地点については、飯山北高等学校郷土研究会による「昭和24年度下水内郡遺跡発掘調査報告書」が発刊されているが、本報告書は手書きによるもので、発掘直後の報告である。当時の状況を知る貴重なものであるため、小田切氏の承諾を得て再掲するものである（なお、遺物図は省略した）。

下水内郡北部の遺跡 岡山村桑名川字東原1 1949年9月
飯山北高等学校地歴部員3年生 小田切 茂

桑名川遺跡概説

桑名川は北部信越国境に位置し千曲川によるV字谷の沿岸を走る谷街道により発達した一街村でこの地は川の西岸につき出た沖積地層である。私の今回発掘調査した遺跡は桑名川馬場部落の南方高地東原と称する地籍である。

東原遺跡は明治年間、県道開設の折、残丘の土を掘り割ったため発見されたもので、約100m四方の範囲にわたっている。そして現在では遺跡の大半は破壊されている。大正年間に至り飯山鉄道開設の折、国道より西北にかけて残丘の土を掘り取った。その折、道路工事の時と同様に多数の縄文式土器が出土した。その他古墳時代の遺物である銅剣・銅鏡・櫛が発見された（現在、桑名川渡辺要氏宅に銅鏡2点程所蔵する）。これより推してこの残丘の上に古墳があったことが明確である。現在、馬場部落の西北に円墳2ヶ及び方墳1ヶがある。

発掘調査日記

7月7日（曇後雨） 東原遺跡の東端は千曲川に面し急傾斜をしている。現在では4年前の洪水のため一寸川の内へ崩れ込んでいる。私は舟の操作中、ふとその崩土の中に黒色の層を発見した。掘ってみると土器片が見出された。午後2時、移植ゴテ・スコップ・ザルを持って現地へ向かった。天候は不順でコマカ雨のため土はドロドロしていた。まず千曲川水面より1mの高さの所から掘り始めた。ただここは土崩れのため遺物包含層が一定の方向に向かっておらず発掘に困難を極めた。間もなく炭粉が出てきた。土器片も続々と現われた。しばらく進むと大小様々の石が多数現われた。これらからこの地は明らかに住居址であったらしい。土器片は相変わらず出てくる。なお掘り続けると私は偶然歓声と共に香炉の頭部を掘り出した。そのすぐ傍からは発火石と石鏃が現われた。また石錘と塗朱土器の破片が出土した。その他きれいな小石2・3ヶと骨を3片程、それから凹石が出てきた。天候は悪化し雨が背を濡らしてきたので発掘を中止し、出土品を持って家へ引き上げた。土崩れのため柱跡分明ならず。大変残念なことである。

7月8日（晴） 前日発掘せし所より10m程離れた所にも黒色の層が露出していたので、本日さっそく現場へ行ってみた。層は傾斜して一方は千曲川の中へ突入している。この地は含有層の上部へ堆積している土が厚いので含有層は乏しく、従って完全な土器は見られない。この地の形状は千曲川へ直角にきり立っているため舟の中において発掘した。今日の発掘も昨日の発掘も場所柄至って小規模なものである。本日は土器片は前日と同様に多量に出土した。また注口土器の注口部と土製の錘が2ヶ出土した。それから凹石と石錘が1ヶ発見された。

8月4日(晴) かつて表面採集を行った畑を発掘してみようと思い、桑名川下村の地主である桑原録郎氏に承諾を得て試掘坑を入れて見た。その結果、土壌の堆積状態は次の如くであった。まず表面より赤土が55cmあり、その下に灰色がかかった黒土の層が20cm位堆積し、その下に酸化したらしい鉄のさび状の土が5cmの厚さをもっていて、その下約50cmが黒色土の遺物含有層であった。遺物包含層に突き当たると炭の粉が続々と現われ土器片も多数出始めた。この地はかつて鉄道工事の折採土したのであるが、その時遺物包含層の中から多量の土器類が出土した。私はこの地域は遺物包含層がないものと思っていたが、今回試掘坑を入れて遺物包含層があることを知った。従ってこの地域は遺物包含層が二重になっていることになり大変興味深い。

8月5日(晴) 午前9時より昨日試掘坑を入れた現場へ行き、発掘を開始した。妹の応援により次頁の図の如くトレンチを入れた。試掘坑の傍に大型甕形土器があり、その上には大きな石がのっていた。破壊がひどくその真姿は分明ならねども、およそ人骨を入れて埋めたものと思われる。西北へ歩を進めるに従って土器片がいよいよ多量となり、底部や取手が著しく姿を現わした。

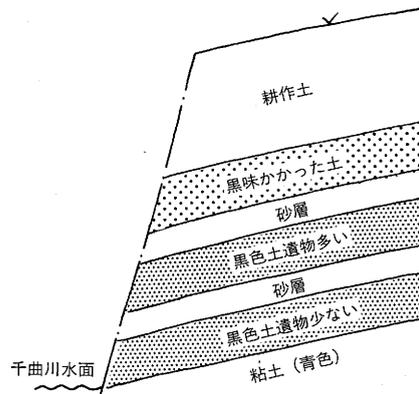
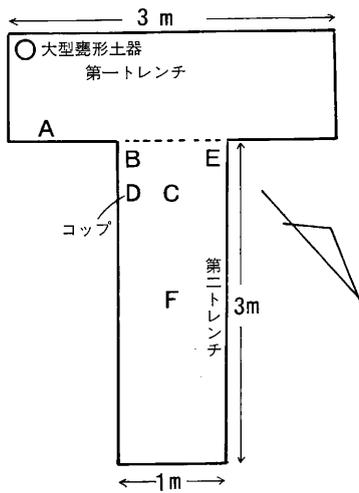
A地点へ至り黒曜石の矢の根(無茎のもの)を発見した。

8月6日(晴) 第一トレンチより北東へ向け長さ3mのトレンチを入れる。これを便宜上第二トレンチとする。第二トレンチでは土器の出土量が増大し、B地点から名称不明の土器(仮に装飾品と命名する)が、またC地点からは発火石が現われた。真夏の太陽は心もなくギラギラと背中を照らし、土いきれのため頭がボーッとする中で、私共は古代探究の情熱に燃え黙々と発掘を続けた。太陽が西の山に没する頃、私の胸は高鳴った。完全なコップが姿を現わした。即ちD地点にその口を北東へ向けて埋没していた。この地点から北東へかけて鉢形土器が並座していたらしく、その底部が数ヶ見られ、またE地点からは薄手のお碗型土器が発見された。これは胴部がついている。

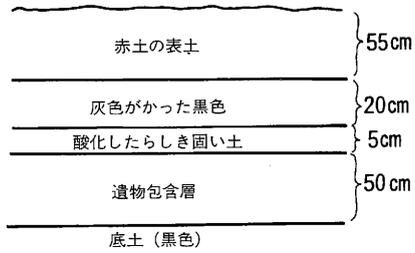
8月7日(晴) 畑の都合上、発掘を中止し、次回の発掘をもくろみながら埋土をした。今回の発掘の最大成果はなんといっても完全なコップで、現在のものかとあやしまれる程である。なお第二トレンチから軽石の浮子が出土したことを付け加えておく。この地点は包含層と底土が同一の土壌のため、柱跡が発見出来なかったのを遺憾に思う。

結 語

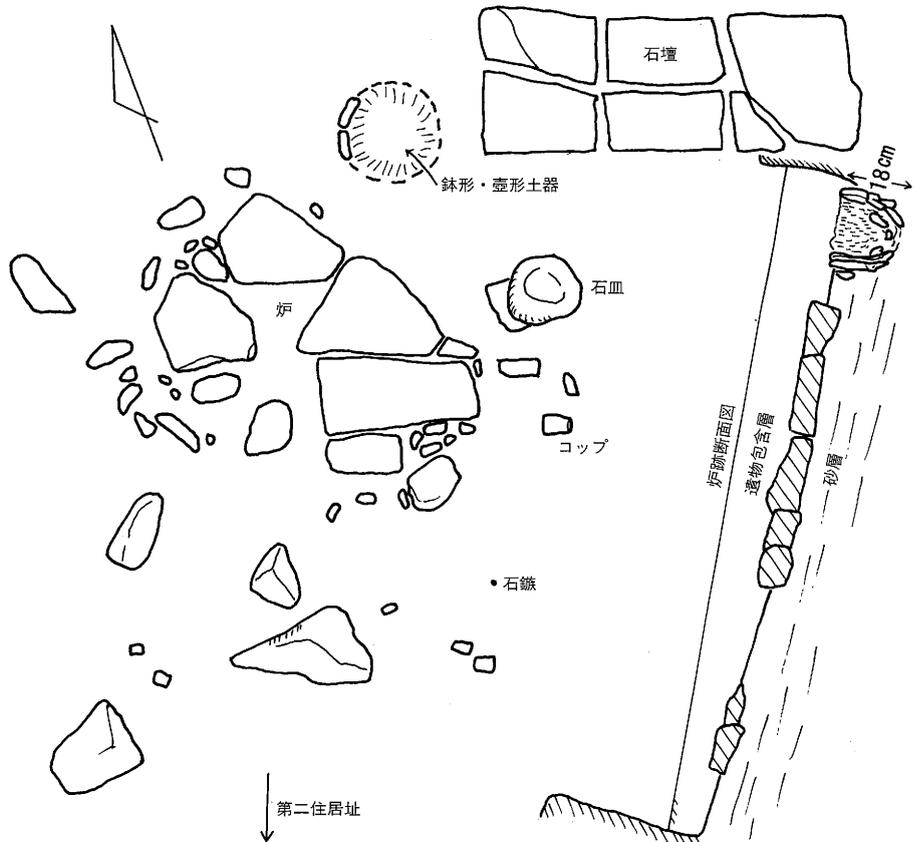
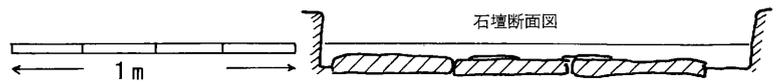
土器類 考古学上の遺物中で最も重要なものは土器である。土器は先住民族の生活やその文化程度を示す史書といわれている位である。私が今回発掘した東原遺跡の出土土器は縄文式中期(後期にかけてのものもある)のもので、出土量は莫大な数に上る。そして他地方にない形式の土器が多量に見られるので、藤森栄一氏はこれを中期縄文式土器の最も退化型の一つとして注目している。土器の分類については藤森氏の「信濃下水内郡桑名川の土器」に詳しく載せられている。ではこれから私の発掘した出土土器について少し述べてみよう。土器の形状としては鉢形が最も多く、埴形・椀形・甕形がこれに次いでいる。鉢形では完全なものは見られないが、その底部が10数ヶ見られる。いずれも厚手のもので綱式様の圧痕がある。これは関東における加曾利E式に属するものと思われる。椀形は2点程見られ、全般として薄手で文様がなく底部はやはり綱式様文様である。埴形は完型なものはないが破片の出土は多量である。薄手の硬に焼成で物を煮た形跡、すなわち内部には煮沸垢がついていて外部は炭粉が付着している。文様は平行線文や列点文様で所々が8字形に結んである。形態は口唇部が少し外屈していて奇怪な飾りや釣手穴がある。甕型としては人骨を入れたと推定されるもの1ヶで文様は太い斜行線文を主体とし、太い突起平行線文がこれに付す。(円形にあるいは直線に)取手は雄大なもので穴も深い。この土器は関東の土器時代区分では勝坂に属するものではなかろうか。藤森氏の書によれば未だ如何とも決定し難いといっている。次に注口土器



c 地点土層模式図
小田切茂氏原図をトレース



a 地点トレンチ及び土層図
小田切茂氏原図をトレース



b 地点出土炉跡及び石壇
小田切茂氏原図をトレース

であるが今回の発掘により注口部が2点出土している。焼成は至って硬く一つは白褐色他は黒褐色を呈している。また今回出土した土器片の中に塗朱のものがあったが、これは藤森氏の説によると台付椀であって磨消縄文の上から塗朱してある。

第4章 ま と め

東原遺跡は、昭和18年藤森栄一氏が「信濃下水内郡桑名川の土器」というタイトルで、人類学雑誌58巻3号に東原遺跡出土土器を紹介されて以来、県内屈指の縄文後期遺跡として学界に知られるに至った。「信濃史料第1巻下」の要説の中でも、県内における縄文後期加曾利B式の代表的遺跡として取り扱っている。このように学界によく知られた本遺跡も、昭和24年小田切茂氏等を中心とする飯山北高等学校郷土研究会の調査及び昭和27年秋の神田五六氏の調査以後、ほとんど省みられることなく40数年の年月が経過した。その間遺跡内に郵便局や民家が建築され、更には畑地として手入れの行き届いていた千曲川への傾斜面も農業の構造的変化の中で全く荒廃し、雑草が生い茂り様相が一変している。

さて、かつて小田切茂氏等が中心となって発掘調査した、a・b・c地点については、小田切茂氏が故郷を離れられて以来、判然としなくなっていたが、今回同氏に問い合わせた所、快く地図上に地点を明示していただいた。長年の謎がようやく解けた思いであり、同氏に心より感謝申し上げたい。

今回の調査は、住宅建設にともなう事前試掘調査であることは、例言で触れているとおりである。地点は、東原遺跡北端、国道117号線西側の一段低い地点である。ここは、かつて飯山線敷設の折に削土されたと考えられる場所であり、遺跡はすでに消滅しているのではないかとの地元の方々の意見もあったが、念のため調査を行うこととしたのである。

調査の結果は、畑地の耕作土は埋土であり、やはり削土された場所であるとの確証を得たのである。従って、近世以前の遺構の発見は皆無であった。ただ埋土中より縄文土器片及び石鏃、少量の弥生中期土器片が出土した。従って、この埋土は遺跡が存在する場所から搬入されたものであり、その場所も出土土器等からみて遠方ではなく、東原遺跡地内の近辺のものであろうと考えられる。

さて、埋土より発見された土器は、縄文土器がほとんどであり、年代的には早期、前期、中期、後期と多岐にわたっている。主体はいうまでもなく中期、後期の土器片であり、当時の土砂の搬入手段等をあわせ考える時、遠方からの搬入でなく、東原遺跡地内の土を搬入したことは事実であろう。

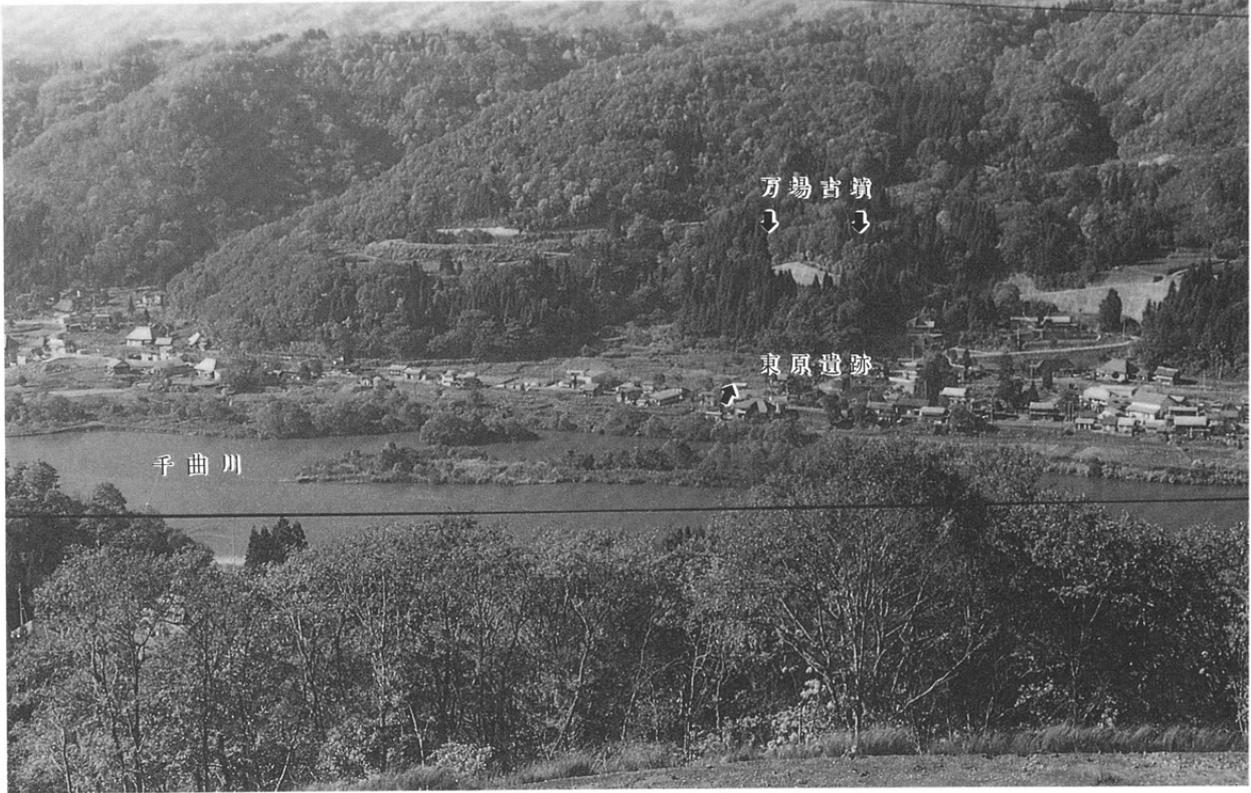
従来、東原遺跡からは縄文早期、前期の土器の出土は知られていないが、遺跡の立地等からみて案外に存在するのかも知れない。弥生中期土器片については、新潟県十日町市で栗林式土器が出土していることからみて、通過地点の一過性のものなのか、あるいは東原に定着したものなのかは、今後の研究課題としたい。

今回の調査と圃場整備事業にともなう調査により、東原遺跡の分布範囲はかなり明確化した。すなわち、岡山上段崖下にまで遺跡が広がっておらず、段丘上に限定されること。更に国道沿いの西側低地部分は、削土等により破壊されていること等である。ただ、くどのようなが、国道西側部分でも低地以外には遺跡の存在する可能性が高いことを指摘しておきたい。

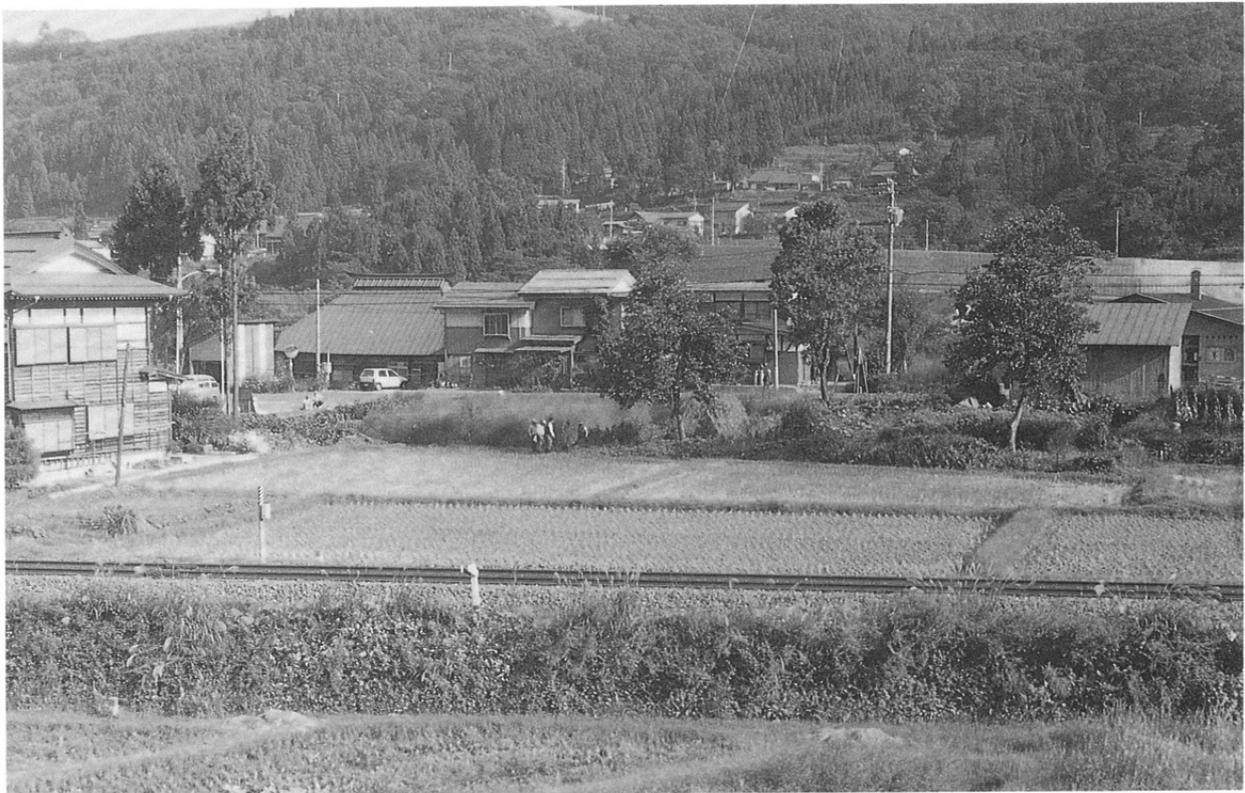
以上、今回の試掘調査の所見を略述した。これをもって粗笨ではあるが“まとめ”にかえたい。

末尾ながら、今回の調査にご協力いただいた平田辰男馬場区長さんはじめ地元の方々、調査に直接従事された作業員の皆さんに衷心より感謝申し上げる次第である。

PLATE



▲ 遺跡遠望（対岸野沢オートレース場より 1994. 11. 8）



▲ 遺跡全景（調査前 西から）



◀ 調査前の状態（北東から）



◀ 重機による表土はぎ



◀ 調査地北東部（南西から）



◀ A・B-7・8区の調査
(白い札が遺物出土地点 南西から)



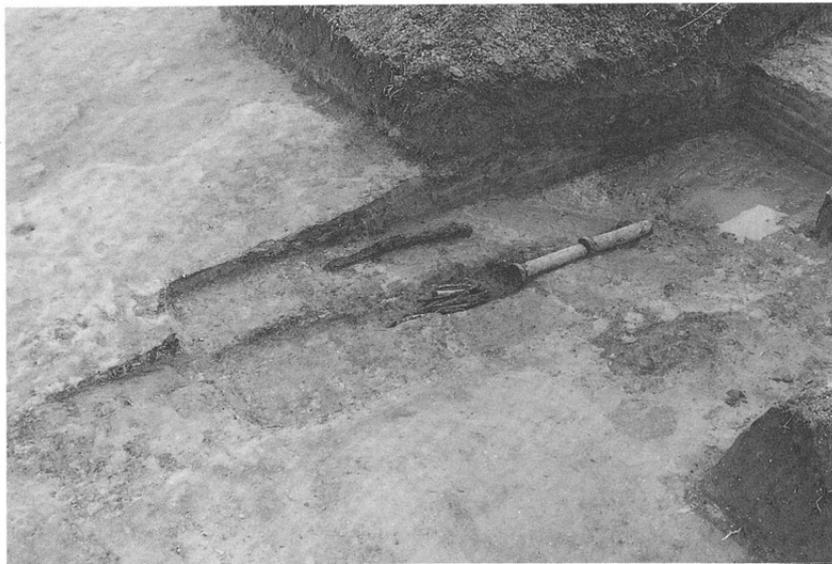
◀ A～C-7～9区完掘状態
(南西から)



◀ A～D-3・4区の調査
(北西から)



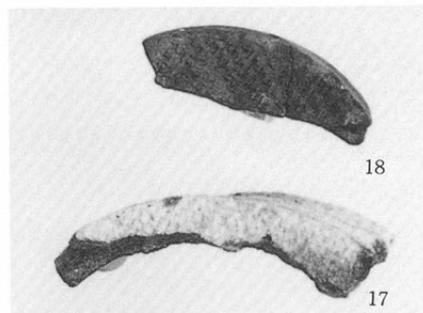
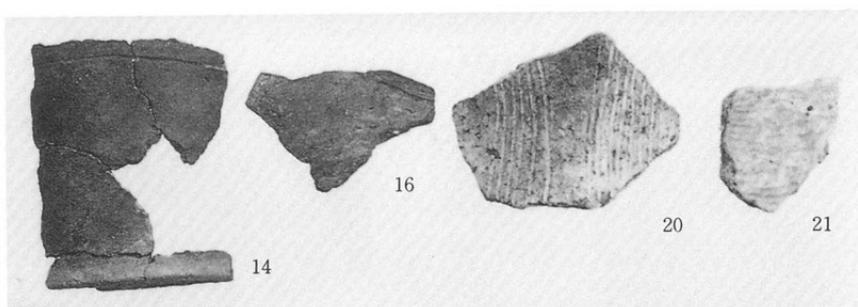
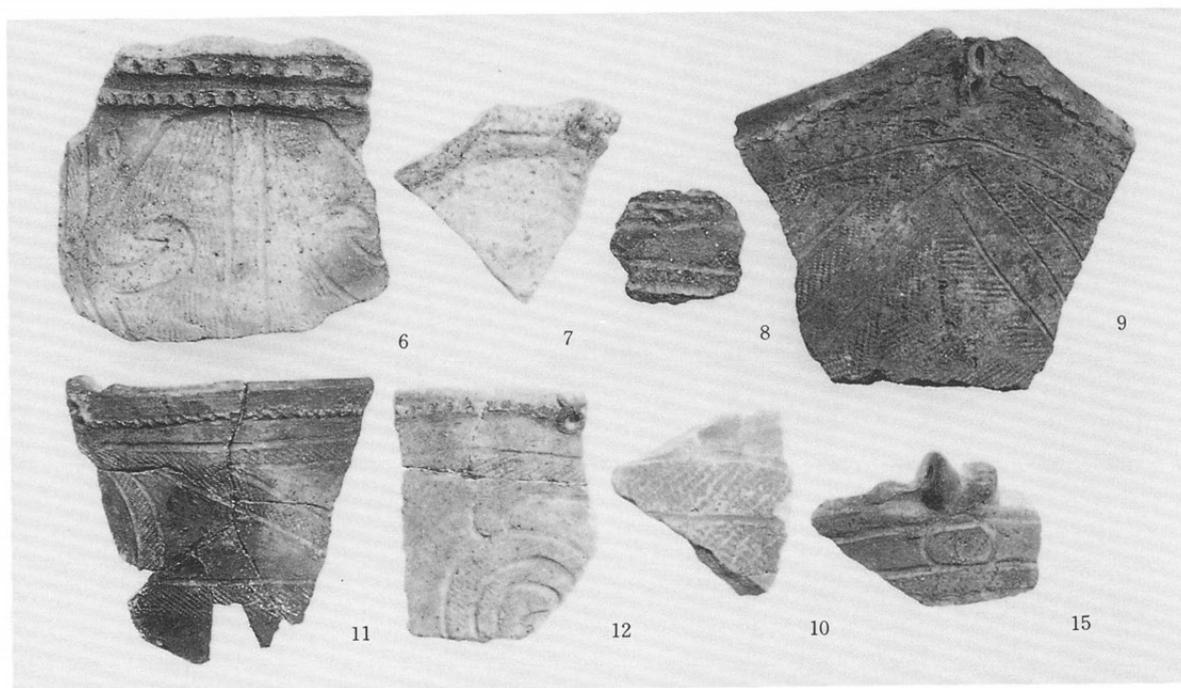
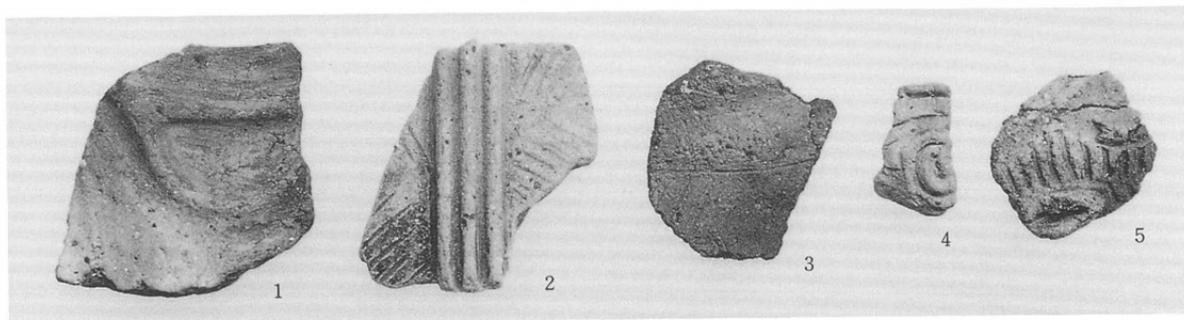
◀ 炭焼き窯上面輪郭（西から）



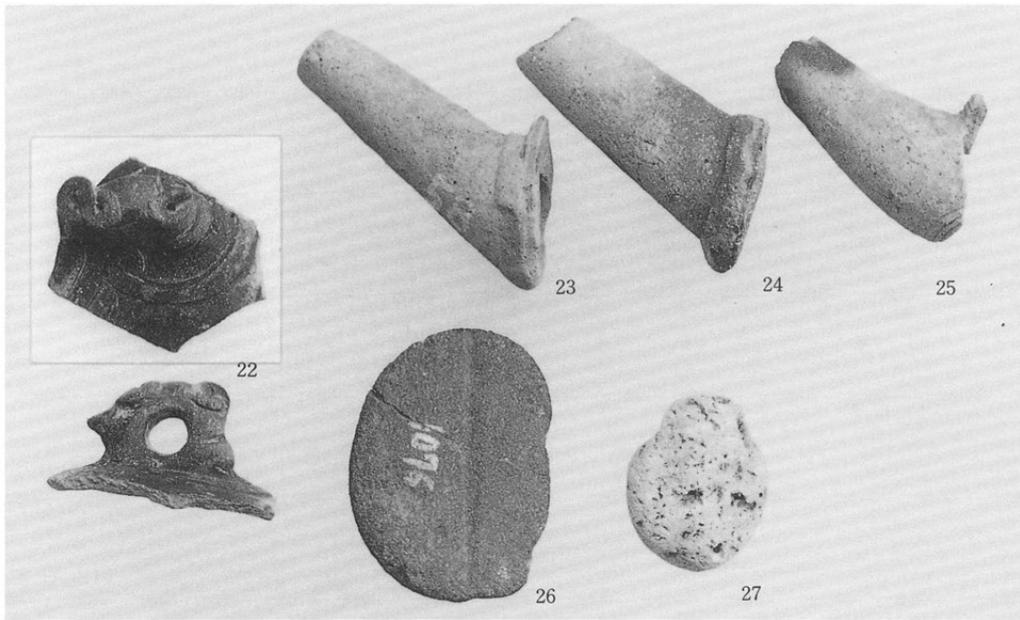
◀ 炭焼き窯完掘状態（北から）



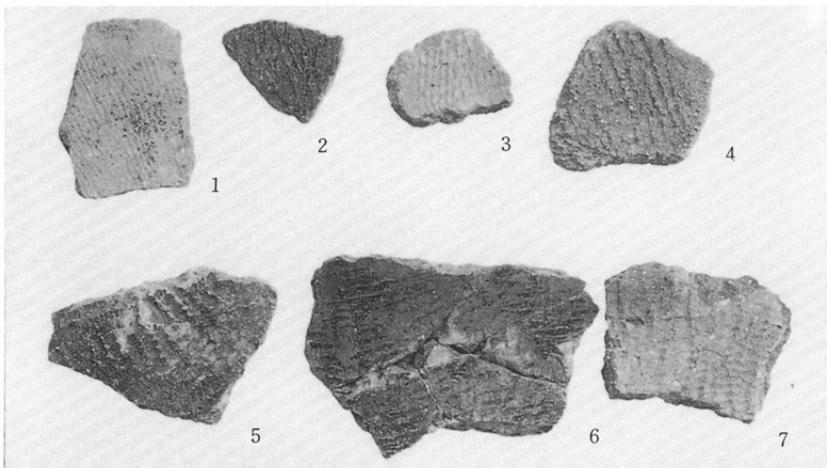
◀ A～D-3・4区完掘状態（北西から）



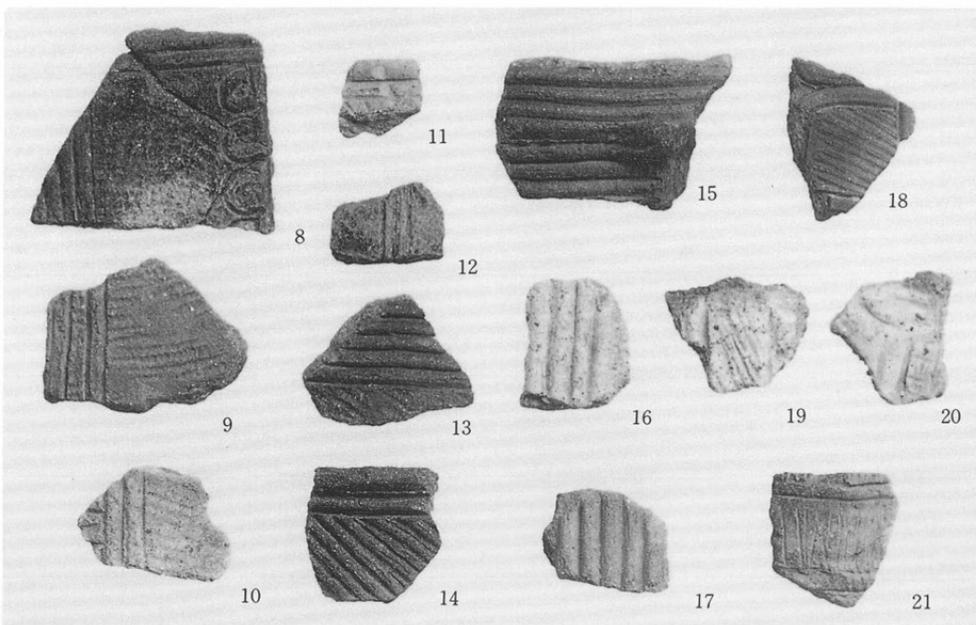
▲ 昭和24年出土遺物



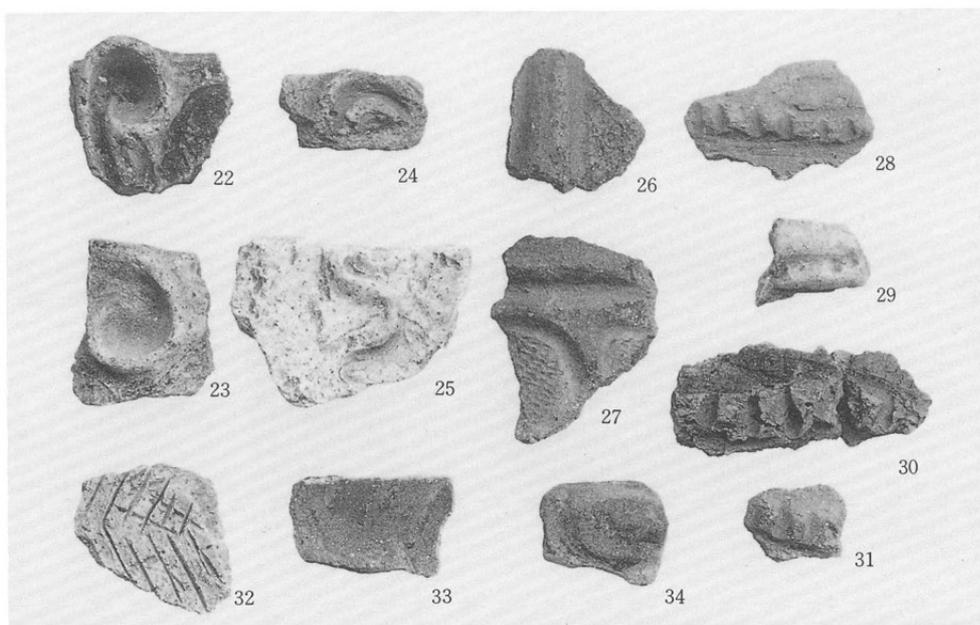
◀ 昭和24年
出土遺物



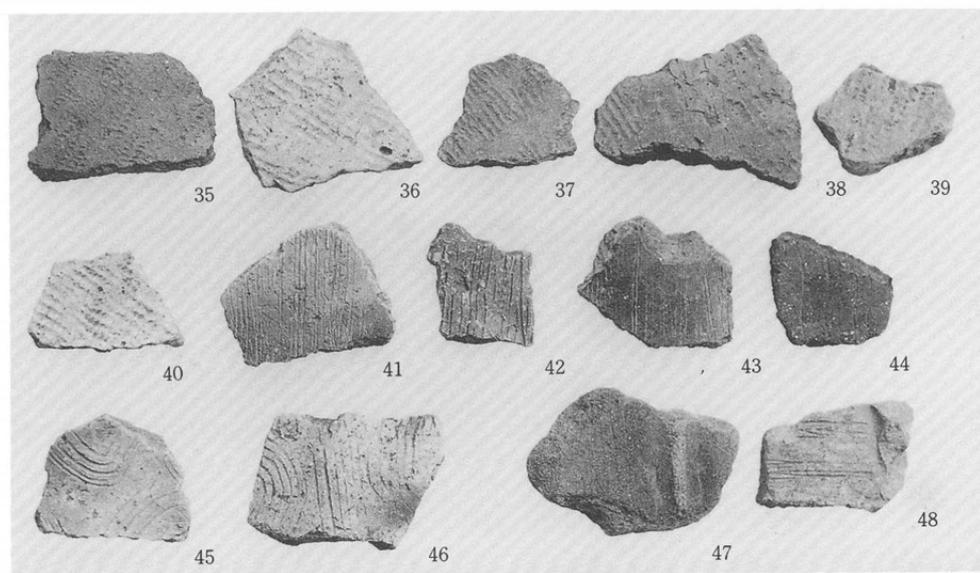
◀ 本年度出土遺物
縄文早・前期の土器



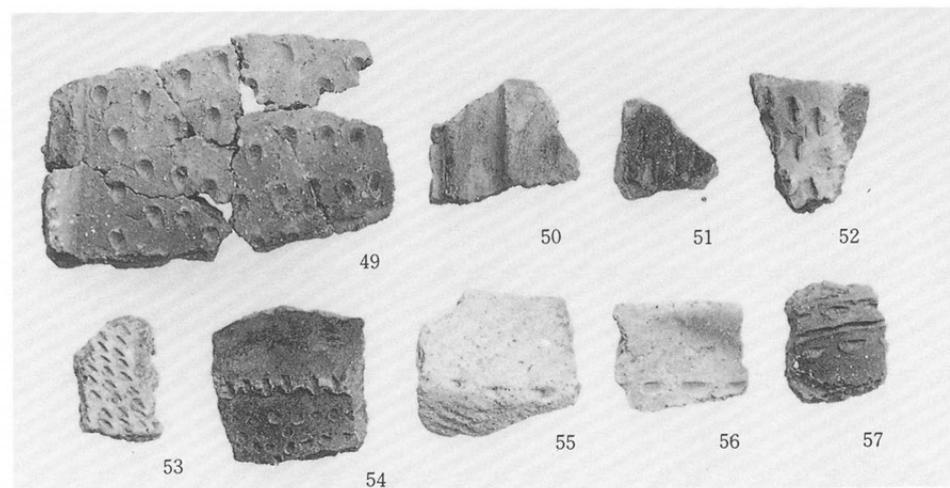
◀ 縄文中期前葉の土器



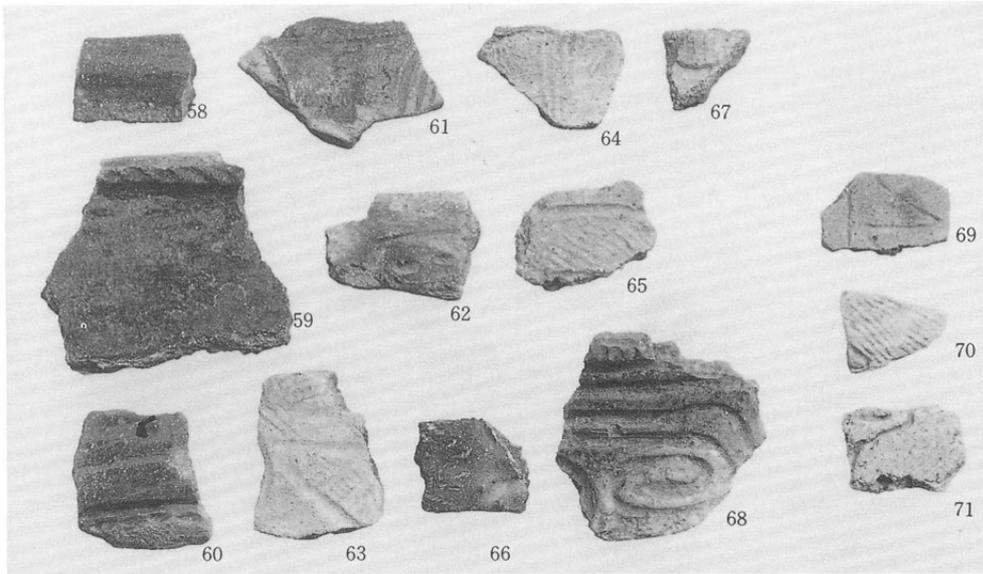
◀ 縄文中期後葉の土器



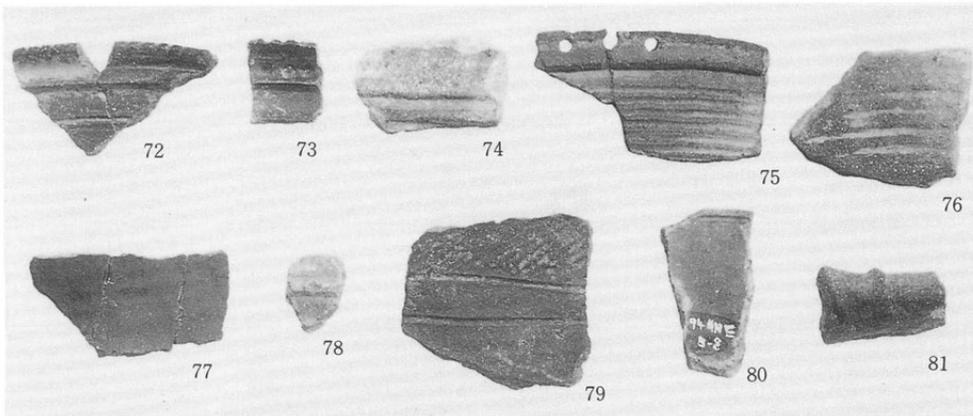
◀ 縄文中期後葉～
後期前葉の土器



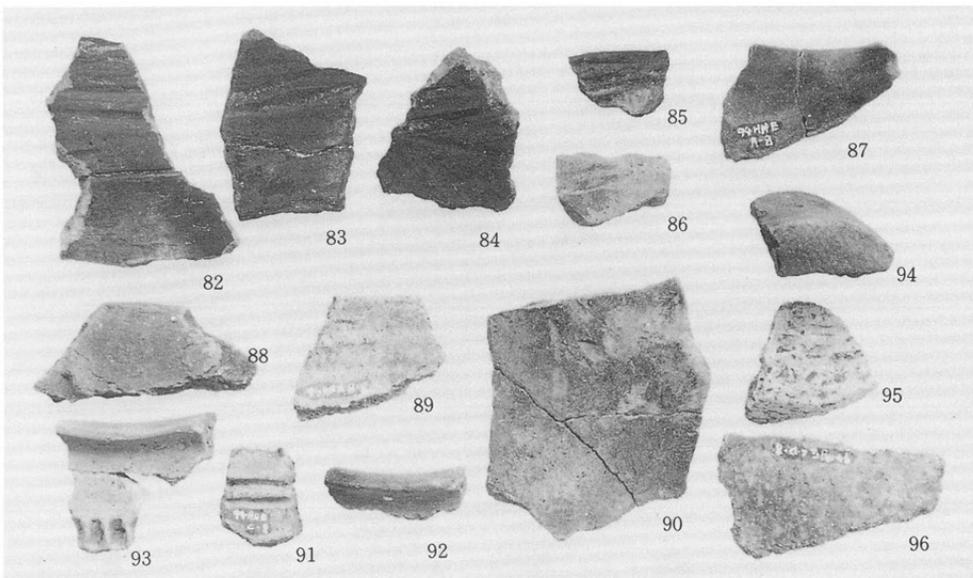
◀ 縄文後期前葉の土器



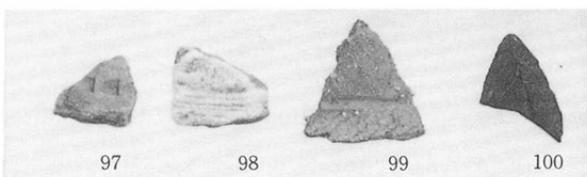
◀ 縄文後期
前葉の土器



◀ 縄文後期
中葉の土器



◀ 縄文土器



◀ 弥生土器・石鎌

飯山市埋蔵文化財調査報告 第45集

東原遺跡Ⅲ

平成7年3月10日発行

発行者 飯山市大字飯山1110-1
編集者 飯山市教育委員会

印刷所 長野市柳原2133-5
ほおずき書籍(株)

